

〔研究余録〕

明暦二年

検地帳の特質

貞享四年

七尾 美彦

明暦二年の検地帳と貞享四年の検地帳については、
『国史研究』五六号に拙文を掲載させていた。以下。

その中で私は、貞享四年の検地帳に見える「分米」を
常識的に收穫高と解し、それを以て明暦二年の検地帳に
見える「高」をも收穫高と解釈しようとした。

しかし、『平山日記』の貞享四年の記事を読むに及ん
で、この常識的な解釈は再考を要することに気がついた
のである。

『平山日記』の貞享四年の記事の中に「御新検田廻御

定積之寛」というのがあるが、その中に、

一 上田 を反歩 此高式石六斗………

分米 壹石三斗 残り壹石三斗百姓取分

という一節がある。

一反歩の收穫高二石六斗の内訳が分米一石三斗と百姓取分一石三斗だということだが、そうすると「分米」は年貢高の意味に解される。

「御新検田畑御定積之寛」にはこのような記載が沢山ある。

また、森林助著「津輕黒石藩史」の中に、元禄七年の「検地寛」があるが、その一節に

「夫者分米トモ名(ッ)ケ米納ニモ可致候哉」とある。

こゝでも「分米」は年貢の意味に使われている。

貞享四年の検地帳を見ると、黒石近辺の村々の場合「分米」の高は上田一反につき一石一斗一石三斗である。これは「御新検田畑御定積之寛」の「分米」の高には近似する。

「御新検田畑御定積之寛」は貞享四年の検地と同年のものであり、検地に関係のある文書と用われるから、貞享四年の検地帳の「分米」は年貢高を記載しているのではないかと思われる。

そうだとすれば、明暦二年の検地帳の場合も、畑作物の畝を「物成」としているのだから、年貢高を記載して

いると見てよいと思う。

以上のことが成り立つとすれば、江戸時代の「分米」が一般に收穫高より石高なのに、何故津輕では江戸時代以前の年貢高としての「分米」を用いたのだろうかという疑問がでてくる。

貞享四年の検地帳では「分米」の一反当りの高として「斗代」という用語も使っている。

他藩の検地帳と同じ用語を使いながら、その内容が年貢高と同じ「高」なのは何故だろうか。

検地帳作成者の意図はともあれ、藩の公式帳簿ともいふべき検地帳で、石高を實際の高より低く見せる結果となっていることは確かである。

此ことは他藩の場合でもありうることでないだろうか。それにしても、「御新検田畑御定積之寛」にある上田二石六斗、中田二石二斗、下田一石八斗という石盛は高すぎるのではないかという疑いがあるかも知れない。

しかし、児玉幸多著「近世農民生活史」の第二章に紹介している出羽村山郡尾花沢村の石盛が、上田二石四斗、中田二石一斗、下田二石であることからすれば、この石盛はありえないことではない。

以上、明暦二年、貞享四年の検地帳の場合、他の史料とつぎ合せてみた時、検地帳に收穫高(石高)の記載という通説だけでは、解釈できないものをもっているといふことが解るのである。